

んは、中々やれません、今日小女郎をやるほどにかー飯三杯汁四杯 豆腐蒟蒻さんにやをにや。

保育者のため

幼稚園に於ける自然研究(二)

平山 ひさ

これは前掲幼稚園の遊戯と同じく「幼稚園の理論及實際」と申す書の一部で、自然研究と題されて居る項の抜萃でございます。

○幼兒は風にゆらぐ枝やそよよと動く木の葉で飾られた絶えず青い物のある庭園に置くがよろしい。こういう處では幼兒が平和に幸福に健全に發達して、周圍にある物から力ある静かな感化を受けるので、幼兒は自然といふ廣大な書物を手にしつゝ、凡ての生物の生命に向つて同情を表する様に

なる。凡そ困難な生活、うるさい人生には薔薇の香や、森の中の静かさや、松の緑などが、得も言はれぬ深き慰藉を與へるものであるが、併し何人も此世を捨て、しまつて自然をのみ友とするといふ事はできぬから、自然の方を吾々人類の方に引き寄せ近づけるといふ事は誠にあらまほしい事である。それには幼い時から「自然」と親ませる必要がある。

○自然研究と一口に言ふ中でも、地質學、結晶學、鑛物學などに屬する事柄と動物學や植物學ほどに幼兒に對して興味を惹き起すものではない。それは鑛物などには生命といふものがないから、幼兒が自分の生命にひき比べて興味を有つ愛するといふ事がないからなので、幼兒は主に生命を有つて居る生き物即ち動植物を愛するものである。併し

そうであるからと言つて動植物以外の自然物や自然現象を全く度外視して顧みぬといふ風ではよろしくない。雪が降れば雪の研究をする、蒸氣を見之に付て考へる、といふ様に時に當つて幼児と共に之を考へ之を説明するは必ずしも無用の事ではない。否むしろ教ふべき時に教へ、考へるべき時に考へる良い事である。但し之等は偶然出會した時にすべき事柄なので、幼稚園に於ての自然研究といふ中では動物と植物とが主位を占めるべきである。

○幼児の自然研究といふ事に付ては、最初に、自然に對する幼児の興味を惹き起し、第二に、自然に由て幼児の心情を訓練し發達せしむるといふのが最大要件なので、之に由て知識を増すといふ事は第三位に置してよろし。一體知るといふ事は

それはど價のある事ではないのである。

○兒童期に於ては、万物を愛する様にならせればそれでよいので之で十分である。自然を研究して其中から科學的に眞理を發見するといふ事は大人になつてから永い根強い研究を要するので、人間の幼少な間は、只自然に向つて熱心に愛するといふ心情さへあれば澤山なので、之に引きつゝいて考も知識も出て來るのである。

○幼児に自然を教へるには單に其物の形態に付て數多く教へようと望むには及ばぬ。あまり多く見せると幼児の頭の中で混雜する恐があるから、少しばかりをしかと見せて、自然に對する思想の根本を養うて置くがよろしい。そうするとたとひ幼少の間は自然に對する知識が狭くとも、養はれた根本の思想が基になつて、年長するほど知識が廣

まつて行くものである。

○動植物に手や足があつたり物を言うたりする様
は大人が話す幼兒はそれを眞に受ける、それら
の生物にも心ありとして考へる。といふ事は随分
をかしい事ではあるが、併し幼兒にはまづこうい
ふ方面から入れてよいので、何にもせよ自然に對
する愛を養うてさへ置けば、之が萌芽となつて段
々自然を尊敬し且つ之と親しむ様になつて來る。
○自然を愛するといふ事を一の仕事の様に思はせ
てはならぬ。幼兒として自然といふ空氣の中に在
らしめ自ら之を親愛する様に仕向ける事が必要な
ので、故意に注入する強ひるといふ風では却つて
よろしくな。

讀書の棗

露國 日本 魂 雄 樋口勘次郎著

日本魂雄といふ男の子が、明治八年樺太千島交換
の頃陸中の南部で生れて、小學校を卒業して、大津
の中學に學び更に士官學校を卒業して、立派な軍
人になつて、遂に今回の戦争に出て、所々の戦役
に參加するといふ仕組にして、其間に今度の日露
の戦争の由來、樺太交換から、大津事件、遼東半
島還附等のことを、魂雄が、或は學校の先生に學
んだり或は自分で見聞したりした様に書き下して
さて、本題に這入つてからは、直接自ら戦争に
たづさわつた様に書き下して、陸軍海軍等一切の
出來事を面白く報導して居る、其間には、廣瀬中佐